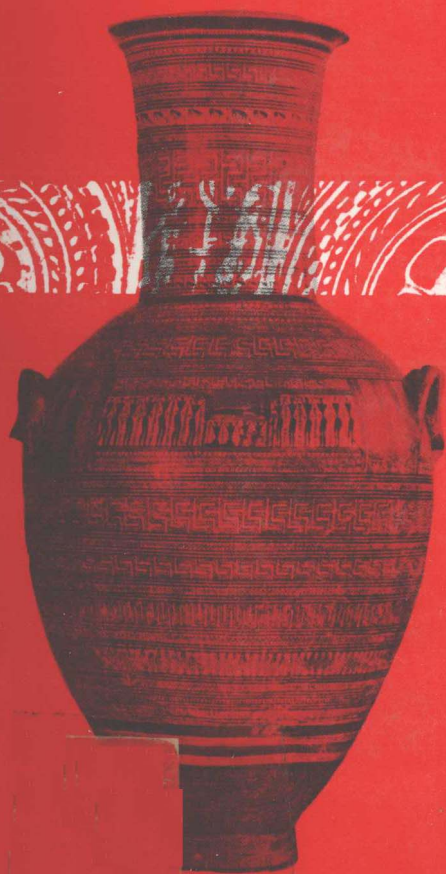


簿記読本

番場嘉一郎 編著



東洋経済 読本シリーズ

31

簿記讀本

番場嘉一郎編著

東洋經濟新報社

編著者紹介

明治42年 東京に生まれる。
昭和9年 東京商科大学卒業、東京産業大学附属商
学専門部教授(21年)、一橋大学助教授
(24年)、一橋大学商学部教授(30年)、商
学部部長(39-41年)、一橋大学産業経営研
究施設長(46-48年)を経て、
現在 一橋大学名誉教授、青山学院大学経営学
部教授、商学博士(37年)、日本学術会議
会員、大蔵省企業会計審議会第一部会長、
日本商工会議所簿記検定専門委員。
主要著書 『株式制度論』昭和29年、同文館、『棚卸
資産会計』昭和38年、国元書房、『原価
計算論』昭和38年、『持分会計論』(編)
昭和43年、『原価管理会計』昭和43年、
『新講工業簿記精説』昭和46年、以上、
中央経済社、ほか。
現住所 東京都渋谷区初台1丁目31番地7号。

簿記読本

昭和49年11月30日発行

編著者 ^{ばんば かいちろう} 番場嘉一郎

発行者 宇梶洋司

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社

郵便番号 103 電話東京(270)代表4111 振替口座東京6518

© 1974 <検印省略> 落丁・乱丁本はお取替えいたします。
Printed in Japan

3033-9331-5214

は し が き

企業の経理部とか、会計課で現実に実施している簿記はいかなる目的をもつものであり、いかなる必要性をみたそうとするものであるか。

わが国商法の総則には、企業は財産および損益の状況を明らかにするため会計帳簿の記録を整然かつ明瞭に行なわなければならない旨が規定されているが、これは企業の経営者にとって、企業の債権者や金融機関にとって、企業の出資者にとって、または一般投資家にとって、あるいは企業の監督官庁や税務官庁にとって、はたまた企業の従業員や労働組合等にとって簿記の数値が必要であることを人々に物語る有力な証左の一つであるといつてよい。あるいは商法の規定を引き合いに出して簿記の必要を説くことはないといわれるほどに簿記の必要性はすでに誰もから認識されているというべきかも知れない。

簿記は企業が営業報告書とか、有価証券報告書とかいう媒体を通じて外部者に企業の財務内容を開示するための基礎データを提供する。簿記の手續を欠いては企業の財務内容を開示することを得ない。簿記は企業の経営者が自己の経営する企業の財務的・原価的実態を知り、各種の意思決定を行ない、企業をより良い方向に導びいていくために不可欠な会計報告の数値資料を提供する。簿記の産み出す帳簿上のデータそれ自体、企業が日常の活動をタイムリーに運んでいくのに不可欠であるといえる面があることも忘れられてはならない。簿記は、企業がその経済的利害関係者の利益にそうように経営されているか否かを物語るデータを提供するのみでなく、さらに国とか地域社会とかいうものに対する社会的責任を十分に果たしているか否かを立証するデータをも提供するも

のといってよい。

簿記の知識は将来、会社の経理とか会計を担当することを志す者、将来、会社の会計監査を行なう専門的職業たる公認会計士になろうとする者、監査役とか、内部監査担当者として会社の経理の調査をしなければならない者にとって必要であるばかりでなく、弁護士とか、経営コンサルタントとか、不動産鑑定士とかいう職業人や一家の主婦にとっても不可欠ないし有用であるということになるから、「簿記の手ほどき」を狙いとする教習機関や書物に対する需要は意外なほどに広汎にわたるのである。

本書はすでに経済読本、金融読本、証券市場読本といった数多くの読本を出版して好評ををくしている東洋経済新報社の読本シリーズの一卷をなすものである。単に易しく書いた入門書というだけでなく、他の読本との振り合いを考慮して格調の高い入門書となりうるよう編者は慎重な配慮をし、簿記の歴史から説き起こし、簿記の本質をわからせるとか、簿記の機能・役立ちを詳しく述べるとか、他の簿記入門書には見られないような特色を出すことに努めた。

簿記の手続全般をわかりやすく説明したことも勿論であり、商業に属する企業以外に工業に属する企業の簿記における特異性を明らかにすることとし、またわが国企業の形態として最も多数を占める株式会社の簿記の説明や、漸増傾向にあるE D P簿記の要領を得た記述をも含めた。株式会社の簿記に関しては最近の改正商法および改正企業会計原則における考え方を取り入れ、遺漏なきを期した。

やがて証券取引法の適用をうける株式会社に要求される連結財務諸表の作成手続は本書では説明されていないが、各会社で連結決算を実施する時期になってからこの項目の増補をする考えである。

われわれ編者二人は東洋経済新報社からこの読本の執筆を依頼されて以来、本書の構成をいかにすべきかについて十分に討議し、入念な構成計画をたて、16章のうちのどの章を誰に執筆して貰うことが妥当かを検討し、そのプログラムに従って多数の方々に分担執筆をお願いした。幸いにして別記の如き方々からわれわれの意図するところに添う原稿を書き上げていただいたことに対しわれわれは深甚なる謝意を表する。またこれらの玉稿に対してわれわれが甚だ無遠慮な手入れをした箇所もあるが、心からご寛恕を乞う次第である。

本書が本シリーズ中の既刊の他の読本と同じく江湖から高く評価され、広く読者の満足をかちとり得るならば編者の最も欣びとするところである。

昭和49年10月

番 場 嘉 一 郎

小 林 健 吾

執筆分担一覧

- 第1章 小林 健 吾 (滋賀大学教授)
- 第2章 小林 健 吾
- 第3章 番場嘉一郎 (一橋大学名誉教授)
- 第4章 岡 下 敏 (青山学院大学助教授)
- 第5章 岡 下 敏
- 第6章 岡 下 敏
- 第7章 飯 田 穆 (名古屋大学助教授)
- 第8章 清 水 哲 雄 (滋賀大学助教授)
- 第9章 清 水 哲 雄
- 第10章 清 水 哲 雄
- 第11章 清 水 哲 雄
- 第12章 野村健太郎 (神戸商科大学助教授)
- 第13章 飯 田 穆
- 第14章 野村健太郎
- 第15章 小 林 健 吾
- 第16章 大矢知浩司 (滋賀大学助教授)

目 次

は し が き

第1章 複式簿記の生成……………3

第1節 勘定の生成と人的勘定……………3

1 はじめに 2 勘定の生成と債権・債務の記録

第2節 勘定の拡大と勘定の本質——物的勘定の導入……………7

第3節 勘定体系の確立と複式簿記の制度的完成……………9

1 商品勘定と損益勘定 2 資本勘定の導入 3 決算 残高勘定と期間的計算

第4節 近代的複式簿記の完成——企業資本と期間損益計算……………18

第2章 複式簿記の本質と種類……………21

第1節 経営活動と複式簿記の目的……………21

第2節 複式簿記の本質……………23

第3節 簿記の主体……………24

第4節 簿記の種類……………25

第3章 簿記の機能……………29

第1節 簿記の役立ち……………29

第2節	資産・負債・資本の概念	31
第3節	貸借対照表と財務情報	35
第4節	収益・費用の記録と期間利益の計算	38
第5節	損益計算書と財務情報	43
第4章	勘定科目と取引	47
第1節	勘定科目とその種類	47
1	勘定科目および勘定口座	
2	勘定科目の種類	
3	勘定の様式	
第2節	勘定記入法則	50
1	勘定記入法	
2	貸借対照表勘定の記入法	
3	損益計算書勘定の記入法	
4	勘定記帳例	
第3節	取引の意義と種類	56
1	取引の意義	
2	取引の八要素	
3	取引の種類	
第4節	取引の二重性と貸借平均の原理	59
第5章	仕訳帳・元帳の記入	63
第1節	仕訳と仕訳帳	63
1	仕訳とその方法	
2	仕訳帳の様式	
3	仕訳帳記帳例	
4	仕訳伝票	
第2節	元帳の記入	68
1	元帳の意義と記帳例	
2	記帳上の注意	
3	記帳例	
第3節	帳簿組織	74
1	帳簿の意義	
2	帳簿組織	
第6章	試算表と精算表	79
第1節	試算表の種類と目的	79
1	試算表の意義	
2	試算表の種類	
3	試算表で発	

見しえない誤り 4 誤りのみつけ方 5 試算表の
役立ち

第2節 精算表と複式簿記の構造85

1 精算表の意義 2 精算表の種類 3 精算表の作
り方

第7章 決 算 概 論91

第1節 決算の意義91

第2節 決算手続92

1 決算予備手続と決算本手続 2 損益勘定の設定と
純損益の算出 3 純損益の処理 4 資産・負債・
資本勘定の繰越記入と勘定の締切り 5 大陸式決算
法における開始記入

第3節 決算報告書の作成100

第8章 商品売買と勘定・帳簿103

第1節 商品勘定と売買損益103

1 商品勘定の分記法 2 商品勘定の総記法

第2節 仕入帳、売上帳と仕訳帳の分割105

1 仕入帳 2 売上帳 3 特殊仕訳帳としての仕入
帳・売上帳

第3節 商品勘定の分割112

第4節 商品の棚卸と評価115

1 帳簿棚卸法と商品有高帳 2 商品の評価損と棚卸
減耗

第5節 特殊商品売買等121

1 特殊商品売買の意義 2 委託販売と受託販売
3 委託買付と受託買付 4 割賦販売 5 長期請負
工事 6 その他の特殊商品売買

第9章 売掛金・買掛金と人名勘定元帳……………127

第1節 売掛金・買掛金の処理……………127

第2節 売掛金・買掛金の分割と統合……………129

- 1 統制勘定と補助元帳 2 売掛金と得意先元帳
- 3 買掛金と仕入先元帳

第3節 補助元帳検証表……………135

第10章 現金・当座預金の勘定と帳簿……………139

第1節 現金と現金出納帳……………139

- 1 現金勘定 2 現金出納帳 3 多欄式現金出納帳
- 4 現金収納帳と現金支払帳 5 一部現金取引
- 6 現金過不足勘定

第2節 当座勘定と当座出納帳……………147

- 1 当座預金勘定とその他の預貯金勘定 2 当座借越
と当座勘定 3 当座勘定出納帳 4 多欄式当座勘定
出納帳 5 銀行勘定調整表 6 小口現金勘定

第11章 手 形 の 処 理……………157

第1節 手形の種類……………157

第2節 手形の処理……………160

- 1 受取手形勘定と支払手形勘定 2 手形の受入れ
- 3 手形の振出しおよび引受け 4 手形の決済

第3節 手形の裏書・割引とその処理……………162

- 1 手形の裏書とその処理 2 手形の割引とその処理
- 3 手形記入帳 4 手形借入金, 手形貸付金

第4節 不渡手形……………166

- 1 不渡手形の処理 2 不渡手形の遡求 3 不渡手
形の買戻し

第12章 その他の諸勘定……………169

第1節 流動資産……………169

第2節 固定資産……………173

第3節 長期前払費用と繰延資産……………176

第4節 負債勘定……………178

第5節 資本勘定……………181

第6節 収益・費用勘定……………181

第13章 決算整理……………185

第1節 決算整理の意義……………185

第2節 利益および損失の繰延と見越……………186

第3節 資産評価と整理記入……………191

1 棚卸資産の評価損 2 一時所有有価証券の評価損

第4節 減価償却費の計上……………194

第5節 貸倒引当金の設定……………196

第6節 決算整理の総合例題……………198

第14章 株式会社の簿記……………203

第1節 設立のさいの取引……………203

第2節 開業時までの取引……………205

第3節 増資のさいの取引……………205

1 通常の新株発行による場合 2 転換社債の株式転換による場合 3 株式配当による場合 4 準備金の資本組入れによる場合 5 再評価積立金の資本組入れによる場合

第4節 減資のさいの取引……………208

第5節 合併のさいの取引……………209

第6節	資本剰余金と利益剰余金	212
第7節	損益項目の記帳	215
第8節	未処分利益の期中増減の記帳	217
第9節	利益金処分項目の記帳	218

第15章 工業企業における複式簿記……………221

第1節	工業企業の特徴と工業簿記	221
1	工業企業の特徴	
2	工業簿記の特質と方法	
3	工業簿記の分岐	
第2節	原価計算が行なわれていないときの勘定体系と勘定記入	223
1	製造活動勘定の設定	
2	原価計算が行なわれない ときの売上品原価の算定	
3	原価に関する諸勘定の 記入	
第3節	原価計算が行なわれているときの勘定体系と帳簿組織	230
1	原価に関する諸勘定の記入	
2	原価に関する勘定 と補助簿	
3	工場元帳制	

第16章 E D P 簿 記……………235

第1節	EDP簿記とインプット・データ	235
1	EDP簿記と手作業簿記	
2	インプット・カード の設計	
3	インプット・データのチェック	
第2節	仕訳および転記	241
1	仕訳および仕訳テープの作成	
2	総勘定元帳マス ター・ファイルの作成	
3	資金管理	
第3節	決算処理およびマトリックス簿記	249
1	決算処理	
2	マトリックス簿記	
3	EDP簿記 システムの課題	

簿 記 読 本

第1章

複式簿記の生成

第1節 勘定の生成と人的勘定

1 はじめに

複式簿記も一つの道具であり技術であり、システムである。しかしそれは、自然科学的あるいは工学的技術やシステムに対比する意味における社会的技術でありシステムである。この社会的技術であることは、社会的技術一般がそうであるように、次のようなその本質的特徴をもつことになる。

すなわち、第一にはその生成の契機と土壌において、そのような技術等を必要とする社会的な要請が存在していることである。工学的技術は偶然的な発見等によって始められ、それについての知識欲からだけの研究によって促進されるかもしれない。しかし社会的技術等においては、このようなことはない。しかも多くの場合に、新しい技術等を生み出すに至った社会的必要は、初めからその本質的な姿で明瞭に意識されているとは限らない。それはしばしば、その時々を環境として当座的で部分的な側面についてだけ意識されるにすぎなかったりする。そしてその本質的な必要の全体の姿は、あるいは技術自体の発展のなかにみずからをさらけだしたり、あるいは歴史的な経過とともに多くの人の洞察を通じて明らかにされたりする。

このように、技術に対する必要が必ずしも明瞭に本源的な完全な姿で知られにくいとともに、研究室等での実験によって社会的技術を採用した結果を確かめる

シミュレーション・モデル＝シミュレーションとは、複雑な問題を解決するための体系化された試行錯誤を行なってみる方法である。経営の問題の多くは実際には非常に複雑であり、しかも現実の状況で実験してみることが非常に費用がかかったり、ときにはそうした実験自体が許されないことが

多い、また存在する状況を調査し分析するのではあるが、途中で新しいより良いと思われる方法が提案されたりして、ある方法をとったならばどのような効果があるかの評価も簡単に定めえないことが多い。さらには、予見されなかったような状況が与えられたり、あるいはそれ自身の経過のなか

ことも一般的に困難である。近年シミュレーション・モデルの技法が発展したとはいえ、まだまだ十分ではない。このことは、次の第二の特徴を生じさせている。すなわち、社会的技術等は、一般に試行錯誤的に発展するものであり、かつその発展過程も単純一様ではないことが多い。多くの場合に、多数の人々のさまざまな努力と試みによって、多くの歳月を費やしながらかつて発展するものであることをわれわれは知る。それが社会の発展により大きな影響を与えるものであればあるほど、そうであるように思われる。このことは、さらに第三の特徴に関連してくる。

社会的技術の第三の特徴は、しばしば明らかな発展に対してさえ伝統尊重的な態度をとることに見出しうる。それは、その成果が確認されていないような新しい技法や考え方を安易に採用することによって生ずるかもしれない、取返しのつかない失敗を避けるにはもっとも賢明な道であることを、経験から学んでいるからである。ここで私は、伝統的であることの良し悪しを問うているのではない。社会的技術等においては、こうしたいわば保守性が、誤りに対する自己抑制的な安全のためのメカニズムとして、本来的に内在することを指摘したいのである。

伝統尊重的なことは、次のような第四の特徴と表裏の関係にある。すなわち、社会的な技術等は、そこに含まれている技法や考え方が、そのときの必要や背景において適切でなくなっても、変りなく適用せられる傾向が生ずることである。社会的技術や制度がその存立の基盤を離れて一人歩きする特徴としてとらえられる事実がこれである。

複式簿記が、一つの社会的技術として、これらの特徴に従うことが理解されるならば、複式簿記をわれわれはどのような態度で扱うべきかの問題に対する一つの解答を見出すことができるばかりでなく、複式簿記の理解を妨げている問題の多くを取り除くことができる。

しばしば、簿記はどうにも苦手であるというのを聞く。その理由はと問えば、理屈がわからないからとの答えを得る。ところが、わかってしまえば、複式簿記ほど理論的に組み立てられた技法の他の例を知らないほどである。このようなギャップはどこから生ずるのであろうか。そのもっとも大きな根拠が、複式簿記の発展の歴史において生じてきた多くの約束ごと（各種の基本的な概念）に見出さ

で生じたりして、その評価が誤る危険もある。そこで現実に行えるだけ近づけた状況を設定して(すなわちこれがモデルである)、そのなかでどのようになるかを操作してみることによって、事態の進展を比較的容易にしかも安全に見出そうとする手順をいう。航空機の操作訓練でのシミュレーション・

マシンの有名である。社会科学でも、このようなシミュレーションの手段として数学的技法が利用されるようになった。状況を数式的に設定し、この数式モデルのなかでシミュレーションを実施するのである。このために、莫大な計算が必要とされるので、こうしたシミュレーションはコンピュ